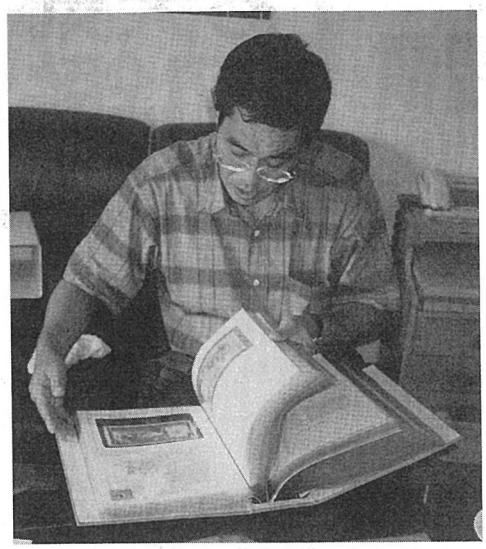

Masayuki Sato　佐藤正行

サトマサ株式会社　代表取締役

血液型／O型
好きな言葉／即断・即決そして実行。計画は緻密に、行動は大胆に。

少年時代に始めた切手収集がきっかけとなって、今や趣味の域を脱したコレクションとなっているという、佐藤正行さんの古銭収集。大判・小判はもとより、日本のコインだけではあきたらず、収集地域は世界各国にまで及び、今や150〜160ヵ国のコインを収集。最終的にはコイン博物館を作りたいという佐藤さんの夢に、花井さんが迫ります。

●●●
切手収集からコイン収集へ

■■幅広くコインを収集されているようですが、コレクターとしての入口はどんなところから？

佐藤　子供の頃はみんな一度はやってみたと思うんですが、やはり切手ですね。国内で発売されたものは、ほとんど持ってますが、切手っていうのは領収証みたいなものでしょ。昭和40年に20円で全国に配達されていたのが、今は4倍の80円ですから、当時の切手をそのまま貼っても、もうだめですよね。

■■価値が変わってくるわけですからね。

佐藤　そうなんです。そういう意味で、ある程度集まれば限度がきて飽きてしまうんです。付加価値がなくなっちゃうわけですからね。

■■コレクションがコインに移っていくわけですか。

佐藤　コインはですね。元号別に集めるとか、一つのコレクションとしての使命を持ってるんです。例えば一円玉ですね。昭和23年から平成9年まで毎年発行されているんですが、百円玉は昭和64年、天皇が亡くなられた年には発行されてないんです。7日間しかなかったわけですからね。そんなわけで当然発行されるべきものが発行されなかったり、発行枚数も大変少ないとなると、コレクターにとっては非常に付加価値が高いんです。

■■そうですか……。幻の、なんていうのはやはり希少価値なんですね。

佐藤　昭和39年、オリンピックの年ですが、オリンピックの記念硬貨は大量に発行されました。でも通常の百円玉の製造枚数はうんと減ってる。すなわち、これも付加価値なんです。

■■（コインのアルバムを見せてもらう）わぁ、コレクター用のこんなきちんとしたアルバムが

「……「大変」も楽しからずや……」

あるんですね。年号がすでに打ち込んであるんですねぇ。こんなアルバム自体が販売さていることすら知りませんでした（笑）。

佐藤　この元号別一円玉のように、身近なところからはいって行くわけですが、私の場合、世界各国に広げてしまったわけですが……きりがないですね。

お金というのはご承知のとおり金ですね。土の中にピカピカ光るものと書き、貨幣の“幣”は布。すなわち絹の繊維、貴重なものですね。ピカピカ光る貴重なもの。これを人間は古代から、豊かになりたい、お金持ちになりたいと求めてきたわけですね。

■■そしてコレクターも一円玉から貨幣大判、小判へと移っていく――（笑）。

佐藤　大判、小判というのは一枚ウン千万の価値を持つものも世の中にはあるわけですよ。私の持っている大判はちょっと秘密ですけど……。こんな話をすると心配だなぁ（笑）。

■■コインの収集はいつ頃からになりますか？

佐藤　小学5年くらいからですね。社会人になって経済的余裕ができてから本格的になりました。こんなものが50万、80万とみんなには笑われますがね。

■■コレクター・スピリッツというのか、小学生から続いている、ということが、コレクションもさることながら私には驚きです。

佐藤　ご覧になりますか？（アルバムボードを開ける）

■■一冊や二冊じゃないんですね……。どれくらいのものがあるんですか？

佐藤　世界150ヶ国くらいのものですね。（と、アルバムを一冊開く）。

■■五円玉のデザインの移り変わりが良くわかりますねぇ。五円玉のデザインなんて、ずーっと一緒だと思ってました。

佐藤　こちらの百円玉はね、稲穂から桜のデザインに変わってるでしょ。これ、昭和42年からです。同時に50円玉も10円玉もギザギザがありましたけど、それがなくなって、五円玉はゴシック体になってます。時代の流れで貨幣の価値やデザインも変わってくるんですね。

■■しかしこのコイン群、どこでどのように集めてくるんですか。

佐藤　東京なんかにコイン専門の販社なんかがあるんです。貴重なものがはいった時は入札もあって、名画のオークションなみですよ。このアルバムにも、これ、陶器でできたお金です。(お金に見えない)。博覧会用に製作されたものも、ほら、(明治25年、シカゴ博)。あと、ここにはありませんけど、一キロ金貨。金そのものの価値と通貨としての価値、両方があります。

■■大判、小判はどうですか。

佐藤　年代別で金の含有量が違うんです。価値も違ってきますね。「万延大判金」はバブル時代800万円くらい、「慶長大判金」は1500万円くらいでしたね。金の含有量とは別に、保存状態によっても五百万単位で値段が変わっていくんですね。大判、小判なんていうのは、指紋がつくと変色してしまいますし、扱いは慎重を極めますし、すべて鑑定書付きです。アルバムなんかは、別注になってしまいますね。

●●●

コインでその国の文化もわかります。

■■なかなか大変なものなんですねぇ。ただ集めればいいってもんじゃない（笑）。ところで、このコインのエリザベス女王のお顔、美人ですね。

佐藤　そうですね、それぞれの国の文化で、貨幣もかなり違うでしょう。発行された時期、一次、二次、三次と貨幣が違う、通し番号の色が違う、シンガポールなどのようにプラスチックのコインがあったり、とね。

■■うーん、さわりを教えていただいただけでも、面白味が少しわかりました。通し番号の色の違いなんて、集めてみてわかるものですよね。普通に使っていたら、まずわかりません。

佐藤　これなんか八角形ですよ。イギリスのクリスマスのコインで、現在も使われてます。日本の5円や50円も穴あきコインとして珍しい方なんですが、デンマークにもあります。

■■しかし、こうして整理をして体系化してこそコレクションという気がします。私には「大変」としか言いようが……。

佐藤　それが楽しみ（笑）。どこの国のものかわからないものもありますけど、それを探すのも、また楽しからずや、ですよ。地図や地球儀、引き寄せてね。

■■それもまた一興よのう（笑）ですか。そんな中で、高価そうに見えて、日本の一円のようなものだったというのもありますか？

佐藤　あります。例えばロシアのもので高額な単位なのに価値が全然ないものもあります。反面、紙幣の試し刷りなんてものが、価値が高かったり。

■■（とある金貨を見て）何ですかこれ？ 面白い！

佐藤　アルバニアの金貨です。表はトンネルを出てきた汽車。裏はトンネルにはいっていく汽車。

■■はぁー？　アルバニアの文化はすごい。お金に遊ぶアートの心がありますよね。

佐藤　それとね、外貨獲得の手段でもあるわけです。コレクター対象というか、お金集めの手段ですね。これもそう。香港の金貨です。1975年からエリザベス女王の香港訪問を記念して毎年一枚づつ発行してるんですね。デザインが十二支です。華僑の人は龍を重んじるんです。これは30万くらいします。

■■これもまた、きちんと……。きょうはコレクションもびっくりしましたが、下の事務室の壁に並んでるお仕事関係の修了証とか許可証とか認定証とか、もうぎっしりと並んでるのもびっくりしました。これもコレクションとか（笑）。

佐藤　もう何か、すべて取得しちゃえ、と、集中しちゃうタイプなんですねぇ。愛知、岐阜、三重、三県にまたがって仕事しているといっても、許可証を持ってるからと言ってテリトリーがありますからね、すべて取れるわけではないんですが……。

■■だけど社長はじめ皆さんお忙しそう。

佐藤　仕事はハードですが、社会に貢献するというか、営利目的で事業はしていますけれども、皆で還元し合いたいといつも思ってます。

■■すると福利厚生の充実化なども？

佐藤　まだまだですけどね。社員旅行も海外へ年二回、実施してます。夫婦の参加も多いですよ。創業は昭和25年ですが従業員の平均年齢は31歳と若いです。

■■社長としてもお若いのでは？

佐藤　速くに両親を亡くしましてね。当時はイヤイヤ継いだんですがねぇ。当時は大工さんとか、製造業。自分の手で何かを作る仕事をしたいと思ってました。

■■このコレクション、今後どのように？

佐藤　夢ですけどね。コインは博物館ですとか、若いコレクターの皆さんの一つの資料となるような、営利目的ではない一つの文化として残していきたいですね。どこかへ展示していただくのもいいですし。

■■そうしていただくと新たな価値が広がっていくというか……。是非そこまでなさって下さい。

佐藤　お金が続くかどうか（笑）……。

INTERVIEWER
花井　美紀
(株) コミュニケーションデザイン代表
イベント司会・コーディネイター、
ビジネスマナーインストラクター、
信用金庫協会女子職員講座の専任講師。
TV、ラジオ等で現在活躍中。